

語るは恥だが、役に立つ(かも)

藤 井 尚 人

奨励者紹介〔ふじい・なおと〕

日本聖公会司祭

日本聖公会神戸聖ヨハネ教会牧師

神戸松蔭女子学院大学チャプレン

姫路日ノ本短期大学非常勤講師

ペトロは外にいて中庭に座っていた。そこへ一人の女中が近寄って来て、「あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた」と言った。ペトロは皆の前でそれを打ち消して、「何のことを言っているのか、わたしには分からない」と言った。ペトロが門の方に行くと、ほかの女中が彼に目を留め、居合わせた人々に、「この人はナザレのイエスと一緒にいました」と言った。そこで、ペトロは再び、「そんな人は知らない」と誓って打ち消した。しばらくして、そこにいた人々が近寄って来てペトロに言った。「確かに、お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれが分かる。」そのとき、ペトロは呪いの言葉さへ口にしながら、「そんな人は知らない」と誓い始めた。するとすぐ、鶏が鳴いた。ペトロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。

(マタイによる福音書 26章69—75節)

父と子と聖霊の御名によって アーメン

はじめまして

同志社大学の皆さん、こんにちは。日本聖公会の司祭・藤井尚人と申します。今、どんなお気持ちですか、イライラしたり、何か落ち込んだり、何もヤル気がでなかったり、していませんか。そういえば、最近、あの友人とうまくいってない、とか……。このチャペルにおられる方の数だけ、それぞれのお気持ちが、今、ここに集まっています。ここは、神さまのお家「祈りの家」です。そんな、お一人おひとりの心の思いを、声にはなくても、そのまま、神さまに差し出してくだされば、と願っています。

初めに申しあげますが、私には立派な学問的、信仰的なお話はできません。私の人生を振り返りまして、劇的な信仰体験とか、さすが、クリスチャン、とかいうお話は見当たりません。しかし、何故か、今、ここで牧師として皆さんにお話をさせていただいている。今日のチャペル・アワーが終わって「ああ、あんな牧師さんでもいいんだ」と思ってくだされば、少しは私でも、神さまのお役にたてるのかもしれない、と思っています。

嗚呼、関西学院大学神学部

関関同立という四字熟語のように表わされる大学がありますが、ここは「同」で、私は「関」の神学部で学びました。何故、神学部だったのか。答は簡単で、他の学部合格することができなかったからです。

高校時代、私は、西宮市（兵庫県）に住んでおりました。高校3年生の進研模試で、自らの悲惨な（笑）成績を顧みず、通学に便利という理由だけで、同じ西宮市にあります関西学院大学を希望しましたところ（希望するのは自由です）、見事、文学部=D、社会学部=E、経済学部=F、という絶望的な判定。しかし、なぜか、神学部だけ=B判定（Aではなかったところが、ビミョーなのですが）。当時の関西学院大学神学部は、キリスト教の洗礼を受けていることが受験の条件、要するに、キリスト教の牧師さんを養成する学部として、その結果を見た高校の進路指導の先生のお言葉が、私の進路を決めました。「なんやよく分からんが、そういえば赤ちゃんの時に、キリスト教の洗礼を受けていたって言ってたな。まあ、ここにしとけ。ほんま、ワシにもよく分からん（苦笑）」。

当時、高校生の私には、三つの嫌いがありまして、（1）キリスト教が嫌い（2）礼拝が嫌い（3）教会の建物や絵が怖くて嫌い、要するに、牧師になる気など全くなく、流されるままに、神学部に入學したものですから、このような「チャペル・アワー」の時間も、悪友たちと勝手に「タベル（食べる）アワー」と言い換えて、「チャペル・アワー」の時間は、神さまの目を逃れるかのように、学生食堂に逃亡しておりました。

今でも、恥ずかしい思い出の一つは「ヘブライ書事件（命名は私）」。神学部に入學しても、聖書の目次すら真面目に読んでいなかった私は、ある授業で「藤井君、ヘブライ書の11章を開けて」という某教授の言葉に「ヘブライ、ヘブライ……、絶対、旧約聖書やな【（注）違います。新約聖書です】」と、一生懸命に旧約聖書のページを探し続けておりましたがいつまで探しても、見つかるわけがありません。確か、その授業、15分位は、沈黙の内に、虚しく、時が止まっていました。ああ……。

しかし、そんな私が、その神学部での友人や先輩たちとの、運命的とも云える数々の出会いの結果、今、ここに、牧師として、私は、皆さんの前で話をさせていただいているわけですし、だから、これだけは、確信をもって皆さんに申しあげます。人と人との出会いによって、あなたの人生は変わります。そして、その出会いのすべては、神さまの愛のわざ、です。たとえば、今、このチャペル・アワーで、あなたの隣に座っている知らない人も、ひょっとしたら、あなたの生涯の友になる人かもしれませんよ。

そんな、ホンモノの出会いのためには、お互いの弱さ、恥ずかしさ、情けなさを正直に分かち合うことが必要です。神学部に入學した頃の私は「牧師になったら、立派な人、人々の模範にならねばならない」と勝手に思い込んでいました。だから、キリスト教から逃げ回っていた。でも、聖書を、少しずつ、読み続けるにつれて「こんな弱い、情けない自分でもいいんだ。こんな恥ずかしい、私だからこそ、神さまは共にいてくださる。大切なことは、強さや立派さではなく、弱さを分かち合うこと」と思うようになりました。

聖ペトロの涙のわけ

先ほど、三木メイ先生に読んでいただきました本日の聖書の箇所には「ペトロ、イエスを知らないと言う」と見出しがついています。これは、最後の晩餐の後、明け方、弟子の裏切りによりローマの兵卒によって捕らえられたイエスに見つめられたであろう、弟子の一人ペトロが「そんな人は知らない（74節）」と師であるイエスを見捨て、その後に「激しく泣いた（75節）」という場面です。

このペトロとはイエスさまの一番弟子、世界で一番大きな教会・バチカン市国のサン・ピエトロ（＝聖ペト

ロ) 大聖堂は、彼のお墓の上に建てられています。後のペトロは初代のローマ教皇、という人物ですが、そんなペトロが激しく泣いております。どうしてか、愛するイエスを、自分の命惜しさに、裏切ったからです。そんな、思い出したくない、情けない、できればなかったことにしたい、自分の人生の、恥ずかしい思い出が、驚くことに、キリスト教の始まりとなり、教会の礎となったのです。

「先生、聖書って、愛とか信仰とか、立派なことばかり書いてある本でしょ」。これは、聖書を読んでいない人の言葉です。私の読み方が間違っていなければ、旧約聖書は、神さまがいかに、人間の罪深さに手を焼かれたか、について書いてある書物であり、新約聖書は、イエスを見捨てた卑怯な弟子たちの弱さと裏切り、そして、十字架の死という、失敗・挫折の物語が包み隠さず記されている書物です。

イエスはペトロに言われました。「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」。事実、そのようになりました。しかし、十字架の上でイエスはこのように祈られました。「父よ、彼らをお赦し下さい」。私には、その時のイエスのこのような声が聞こえるようです。「ペトロ。お前が三度、私を知らないと裏切ることは、知ってるよ。でも、私は、お前を愛している。いつか、お前が強くなった時、立ち直った時、その経験、恥を忘れずに、同じ思いをしている友人を励ましてあげなさい」。

伝説では、晩年のペトロは、祈りのたびに泣いていたそうです。ペトロは、あの裏切りの夜、自分を見つめられたイエスの眼差しを、一生忘れなかった。その涙は、イエスを裏切った後悔の涙であった以上に、そんな自分でも神さまに愛されている、という感謝の涙であったと思います。

わたしの～弱さ～の中にこそ

本日のお話の題を、星野源さんには何の許可も得ずに「語るは恥だが役に立つ(かも)」とつけた理由は、こうしてお話をする時、「藤井先生、立派な話や自慢話の中に神さまはおられませんよ。誰かの、お役に立つのは、あなたの失敗話です」というある人の言葉がいつも、いつも、いつも、忘れられないからです。

だから、今日、私がお伝えしたいことは、これだけです。「あなたの弱さの中にこそ神はおられる、その弱さこそ、神さまと私たち一人ひとりを結ぶ絆になるという、人生の『大どんでん返し』、それが、イエスの復活という聖書のメッセージなのです」。

はじまりは、貧しい農夫の2ドルから

最後に、ここにおられる皆さんに、同志社大学の学生として、これだけはぜひ、知っておいていただきたい物語があります。

創立者である新島襄がまだ青年だった頃、新島青年は函館から脱国をし、密航の末、アメリカのキリスト教主義大学であるアーモスト大学で学ばれました。その新島青年が、ある日、アメリカの小さな村の教会で説教をしました。「私は、日本に戻ったら、学校を建てたい。アジアの深い霧の中にある日本に、このようなキリスト教を大切にしたい大学を創立し、日本の未来を担う若者を育てたい」。そうすると、目の前で募金が始まった。最後にやってきたある農夫は2ドルを募金箱に入れて「今日、自分は汽車で1時間ほどの村からやって来て、あなたの説教を聞いた。この2ドルは帰りの汽車賃です。自分はあなたの夢が叶うように祈りながら、家までの道を歩いて帰ります」。

私が「同志社」という名前を耳にするたびに、必ず思い出す「同志社誕生」の瞬間の、感動的な物語で

す。

やさしい目が～おどりてる姿で～

この礼拝の讃美歌は「同志社大学の皆さんと一緒に歌いたいな」という思いで、私が選ばせていただきました。最初の「やさしい目が」（讃美歌21 470番）は、保育士になるための学びをしている姫路日ノ本短期大学の学生たちが大好きな歌で、子どもたちも歌える、とても可愛らしい讃美歌でした。そして、今から、一緒に歌います「おどりてる姿で」（讃美歌 21 290番）は、BBCの放送作家でシンガーソングライターの、シドニー・カーター（1915～2004）というイギリス人の作品です。オックスフォード大学を卒業後、第二次世界大戦の時、良心に基づいて戦争に行くことを拒否していたフレンド派というクリスチャンに共鳴し、医療奉仕隊として戦地に赴き、中東地域の朝夕に踊っていた、現地の人々の素朴な生き方、礼拝の捧げ方に感動したという経験から着想した讃美歌だそうです。

この歌は、「おどり」を神の働きを象徴するものとして表現しています。神の働きが、ダンスなのです。「自分が踊りたい」のではなく「神さまはこの世を作られた時に、喜びのおどりを踊っておられた」というメッセージ、だから、私もイエスのリードでおどり、歌い、神を讃美しよう。これは、ひょっとしたら、一番大切な福音のメッセージなのかもしれません。

1番から5番までを通して、この世界の創造から、イエスさまの生涯の物語で、2番には今日のお話のペトロも登場しますし、4番の十字架の場面の後、5番の復活の朝の喜びで喜びのメッセージは完結します。

礼拝でダンスといいますと「あれっ」と、思われるかもしれません。しかし、喜びの表現がダンスならばあなたがどこにしようとも、「イエスさまのリードで踊れ」という歌詞は、神さまはチャペルの中だけにおられるのではなく、食堂にも、教室にも、バスの中にも、商店街の中にも、バイトの職場にもおられる。全ての場所は神の働かれる場所、喜びの世界というメッセージなのです。

2番を見ますと、そのことを理解できない人、イエスさまが踊っても、ねたみの心で冷ややかに見つめていた律法学者たちの存在が歌詞になっていますが、しかし、イエスさまはおどり続け、神さまの愛の喜びを伝えました。

私は、神戸の教会・学校に戻りましたら「同志社大学のチャペル・アワーで出席の皆さんとダンスをして、福音の喜びを分かち合ってきました」と報告するつもりです。それでは、一緒に讃美歌290番を歌って、今日のチャペル・アワーを終わしましょう。

父と子と聖霊の御名によって アーメン

2018年5月9日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録